

日本古典文學大系 60

椿説弓張月上

後藤丹治校注

岩波書店刊行

椿説弓張月 上

日本古典文学大系 60

昭和 33 年 8 月 6 日 第 1 刷 発行 ©

定価 650 円



校 注 者

後 藤 丹 治

発 行 者

東京都千代田区神田一ツ橋 2 / 3
岩 波 雄 二 郎

印 刷 者

長 野 市 中 御 所 2 / 3 0
田 中 重 彌

発 行 所

東京都千代田区
神田一ツ橋 2 / 3 株式会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 說	三
凡 例	五
前 篇	六三
題 詞	三
前篇目録	六
卷之一	五
卷之二	一〇二
卷之三	一〇三
卷之四	一五〇
卷之五	一八〇
卷之六	二〇三
後 篇	二二七
備 考	二二七
卷之一	二四三
援引書目	二六六
後篇目録	二九六
卷之二	二九六
卷之三	二九六

卷之四	三三	卷之六	三八二
卷之五	三五七		
統篇	四二三		
拾遺考証	四一五	卷之一	四二五
統篇摠目錄	四三	卷之二	四五三
補注	四八三		

解 説

一

棒説弓張月の作者曲亭馬琴は、本名を滝沢解^{とく}、字は瑣吉、通称を佐五郎、別名を著作堂主人・玄同陳人・簀笠漁隱^{さしかづりいん}などと称した。明和四年（西紀一七六七）六月、江戸深川に生れた。父は旗本松平信成の家宰であったが、馬琴が九歳の時に死去したので、一家は忽ち困窮した。馬琴は父の死後、一旦つとめた武家奉公を思い切り、医者または儒者になろうとしたが、皆志をとげず、当時の戯作全盛の機運に乗じて、作家となることを望んだ。すなわち寛政二年（一七九〇）歳二十四の時、山東京伝の門をたたき、その指導を請い、翌寛政三年、京伝門人大栄山人の名で、黄表紙廿日^{はつかあまつにじゆりよ}余四十両^よ、^{つかいはたしてにふきよげん}尽果而二分狂言を出した。これがその文筆生活に入った第一歩である。その後、馬琴は京伝の家に寄寓したり、書肆蔦屋重三郎方の手代になったりしたが、寛政五年には飯田町の履物商会田氏の寡婦のもとに入夫し、売薬と手習師匠とを業とし、かたわら戯作に従った。同八年の高尾船字文^{よみせん}は読本の最初の作で、これから文名ようやくあがり、さらに享和三年（一八〇三）、読本月水奇縁をあらわしてその地位ははじめて確立した。以後、京伝と競争的に読本の作を出版したが、文化十年（一八一三）京伝が読本界から退身してからは、馬琴の独擅場となり、嘉永元年（一八四八）十一月六日、享年八十二で没するまで、かずかずの名篇大作を発表した。その間、家庭では一男三女の父となったが、天保六年（一八三五）、

長子宗伯が若死にし、同八年（一八三七）には長女の婿にも死別し、馬琴自身も同十一年（一八四〇）には全く失明するなど、晩年の馬琴は幾多の不幸と艱難に遭遇したが、剛氣で負けず嫌いな馬琴は、すこしもそれに屈せず、盲目となってからも、宗伯の嫁お路に口述筆記せしめて、有名な八大伝創作の筆を続けたのである（馬琴の伝記・人物論には古く兩宮一筆庵の曲亭馬琴、饗庭篁村著の少年読本第五編曲亭馬琴、水谷不倒編の列伝体小説史、塚越芳太郎著の滝沢馬琴があり、近くは関根博士著の史話俗談並びにからすかご所収「曲亭馬琴の生活」、真山青果の隨筆滝沢馬琴、麻生博士の滝沢馬琴、宇野浩二氏の馬琴・北斎・芭蕉、暉峻博士著の近世小説の展望所収「滝沢馬琴」などある。アテネ文庫の麻生博士の馬琴もよくまとめられている）。

さて馬琴の著作は「雜書國字小説大小二百八十餘部」（墓誌銘による）もあり、黄表紙・合巻・浄瑠璃・隨筆・紀行等にわたっているが、最も注目されるのは読本の諸作であり、馬琴の本領は実にこの一聯の読本の上にあった。読本は宝暦・明和の間に起り、文化・文政時代に隆盛をきわめた。近世小説の一形態で、その代表的な作家としては、前期に都賀庭鐘・上田秋成らがあり、後期に山東京伝とこの馬琴とがある。馬琴の読本は敵討物・巷談物・伝説物・史伝物の四種に区分するのが普通であるが、この分ち方は大体、馬琴の読本の発達の順序を示している。

第一の敵討物には敵討月水奇縁・雲妙問雨夜月・復讐奇談稚枝鳩・小夜中山石言遺響・三国一夜物語などがある。これらの作は馬琴の初期を代表するものであるが、敵討という題材がすでに陳腐で新味にとぼしく、文学的な価値は比較的ひくいのである。第二の巷談物は一に心中物ともよばれ、三勝半七の話による三七全伝南柯夢、お花半七の話によるその後編南柯後記、お俊伝兵衛の話による旬殿実々記、お染久松の話にもとづく松染情史秋七草などが著聞している。市井における男女の情死事件を武士の世界に移し、忠義節操の物語に改変したもので、敵討物に比較すると高級な作品である。第三の伝説物は世上に流布する口碑伝説を基礎にし、因果応報説を強調した作品である。佐野常世・最明寺時

頼の伝説から出た勸善常世物語、梅若伝説を取った隅田川梅柳新書、下総国羽生村累かさねの怨霊譚によつた新累しんかさね解脱物語などがこれに属する。この巷談物・伝説物が馬琴の中期を示すものであるのに対して、史伝物は馬琴の最後の大成期を代表している。これは歴史上の英雄の外伝ともいふべきもので、馬琴の傑作はおおむねこの史伝物にある。ここにいう椿説弓張月をはじめ、南総里見八大伝・頼豪阿闍梨怪鼠伝・俊寛僧都島物語・朝夷巡嶋記・開卷驚奇俠客伝・近世説美少年録などがすなわちそれである。

右の如く馬琴の読本には、敵討物・巷談物・伝説物・史伝物の四種類があるが、その全般的な特色としてかぞえられるものは、第一に勸懲思想である。一体、儒教では修己治人を本旨として、有用の学を尊重し、戯曲小説は遊戯的なものとして軽んずる傾向が強かった。そこで勸善懲惡を表面の理由として、この種の文学の存在を有意義ならしめようとするものも現われた。馬琴もこの儒教的な立場に立って読本の作を書いているのであるが、特に李笠翁（清代戯曲の大家）の作玉搔頭の序にいわたる「事取ニ凡近ニ而義發ニ勸懲ニ」を理想としていたと思われる。この玉搔頭は李笠翁十種曲のうちに取りめられているが、俊寛僧都島物語の巻尾で「大約曲亭先生の稗史を作るや、事を凡近に取ると雖も、義勸懲に發せざるものなし」といったのを見ても、馬琴と李笠翁とのつながりは明白である（馬琴の著の著作堂一夕話にも近松遺愛の硯のことを述べ、その硯の蓋に玉搔頭の序の句が書かれていたことをあげている。現に馬琴の蔵書には李笠翁十種曲があった。また「清の李笠翁は、博文多藝の人なり」と青砥藤綱摸稜案の跋で激賞している）。馬琴のこの主義は武士を第一階級とし、儒学を官学とする当時の社会の反映ともいえるのである。

第二に馬琴の作品の思想的な背景は、因果応報説である。この因果応報説は元來仏教の方面から来たもので、中国小説にも見られるのであるが、馬琴においては有力な要素となつて、一層その勸懲主義を助長した。かくて家系を重んじ、

血統を尊び、個人は個人として孤立することなく、親より子、子より孫へという工合に、遠い祖先の因果や禍福が後々の子孫にまでも脈を引き、ここに数代をつなぐ因果の理法が貫通する。新累解脫物語の如きは、その特に極端な因果応報の説の上に組立てられたものであるが、他の作品にも多かれ少なかれ、この傾向は顯著である。

このように馬琴の説本は儒仏二教を思想的根拠とし、すべて道義的・教訓的な主義から作られた結果、意志を尊重して感情の発露をさまたげ、人情の機微に触れるものがすくないのである。そして善人と悪人とを対立せしめ、その間に起る波瀾葛藤に読者の興味をそそり、最後に悪人が亡び善人が栄えるという結末をつけているのであるが、しかもその善人は徹頭徹尾善人であり、悪人は徹頭徹尾悪人であって、その中間をゆく、いわば人間らしい人間を取扱ったものはきわめてまれである。且つその偏狭な道義的立場は男女間の恋愛を否定し、親同士の婚約以外、本人自身の意志から発する恋愛は、淫奔な行為としてこれをしりぞけた。かくて人間性を無視し、その描く事件は殊更に奇をもとめようとして、おのずから世態人情に遠いものとなったのである。

要するにこの時代は儒仏二教がならび行われて、世道人心を指導していたのであるから、馬琴もこの儒教の道義的基礎の上に立ち、仏教の因果応報説を併せとったのであって、今日にいう文学の本質からは隔絶した結果を招いたのであるが、しかしこれは他面においては武士の理想の世界を描き、当時の時代精神を顕現したものである。事件の起伏を旨として、人物の描写を軽んじ、しかも高遠な理想をそこに託そうとする浪漫的・伝奇的小説の典型、それを我々は馬琴の作品に見出すことができる。ことに組織的な頭腦の持主である馬琴の説本には雄大な規模と整然たる脚色とを誇るものが多く、この点から眺めて、筋の展開を第一とする、この種の小説の作者として馬琴は極めて剗切な作家であつたとすべきである。またその説本は洒落本や滑稽本などちがひ、理知的・学問的所産であつたから主として武

家の間に愛読され、近世小説のうちで、最も高級な作品とせられて、永く文学界に君臨するに至ったのである。

二

椿説弓張月はくわしくは「續四八郎
為朝外伝」椿説弓張月」という。「椿説」は珍説で、めずらしい説の意（この書第四十九回に「今宵の椿事」、稚枝鳩第七編に「是亦不慮の椿事なり」、四天王剽盜異録に「誠に思ひよらざる椿事なり」などあり、その他俠客伝、八犬伝に散見する「椿事」もすべて珍事である）、「弓張月」は主人公が弓の名人であるから名づけられた（坂井衡平氏は新撰国文学通史で、「弓張月」という書名の先蹤として、自笑の浮世草紙の弓張月曙桜をあげていられるが、その曙桜は源頼光のことを書いたもので、馬琴の著とは交渉がない。また山崎麓氏は盛衰記などに出ている源頼政の連歌の句に因んだものといわれたが、それよりも近松の百合若大臣野守鏡に弓の名人の形容として「弓張月」とあるのが出所であろう）。なお「為朝外伝」の角書つのがきがあるが、「外伝」は中国の漢武外伝、飛燕外伝の如く正史以外の別な伝記、歴史に載せていない伝記をいい、弓張月の内容が歴史ばなれしていることを標榜した。また書名の下に「東都 曲亭主人編次」とある、この「東都（トウト）」は東の都会すなわち江戸の意（東都に對する馬琴の解釈は八犬伝第九輯第三十三「自評余論」の条参照）である。

この弓張月は文化四年（一八〇七）正月、前篇を発売し、後篇・続篇・拾遺と続刊して、文化八年三月、殘篇で完結した。通計五篇、二十九冊。馬琴としても、また読本発達史の上から見ても最初の堂々たる長篇小説であった。しかし馬琴は初めからこのように長篇の作を書こうとしたのではない。このことは既に林美一氏や鈴木重三氏によって指摘せられているが、前篇の終りに「なは後の物がたりは、別に書しるす事又六卷、すべて十二冊を全本とす。云々」とし、さらに「前篇六冊乙丑年冬十一月上浣起草同年十二月十有四日編成投于書肆」としているのを見ると、前篇は文化二年十一月上

旬から筆をとり、同年十二月十四日脱稿、書肆に与えたのであるが、その翌々年正月に発行の運びとなったことがわかる。しかもその前篇起草当時は、前後兩篇十二冊で全本とする予定でいたのであるが、それが時好に投じたため、おいおいと書きついで三十冊近い大作となったのである。「弓張月は此後、編を續こと都て五次、其度毎に板元の利市三倍也と云」（近世物之本江戸作者部類）は、この間の消息を語るものである。この弓張月が最初の計画を改めたことは、八大伝が肇輯に「來ん春毎に嗣出して、全本となさんこと、兩三年の程になん」とあるのに反し、好評のため廿八年間筆を続け、全部で百六冊の分量になったのと同じ事情であつたといえよう。

ここで問題となるのは、前後兩篇十二冊をもつて全体を完結させようと企てていた頃の馬琴は、「為朝外伝」としての全体の構想をどう予定していたかということである。これについては、十二冊という冊数の上から一寸考えると、琉球渡来後の為朝の動靜までは予定していなかったと推定されやすいが、実はそうでなく、馬琴は最初から為朝が琉球に渡来して、国乱を平定する話までも企画していたものと思われる。そのことを証拠だてるのは、弓張月の「題詞」である。この「題詞」は前篇の巻首に載っており、馬琴の自作で、絶句十五首あるが（これが馬琴の自作であることは、自撰自集の曲亭馬琴家集に「源為朝賛」としてその一首を採録し「此レ拙著弓張月初集ニ題スル所、絶句一十五篇ノ一也」とあるので明白である）、それには為朝が琉球の軍勢を撃破し、同国を一統することが詠まれている。また前篇第七回には、琉球の興敗のことを後篇に詳述すると予告している。これによって馬琴が弓張月著作の初めの構想を窺うことができる。

次に馬琴はこの弓張月をどのような材料で書きあげたかを考えて見たい。

元来、読本は構想や筋を重んずるものであるが、読本の作者たちは一般に自分の頭の中からそういう独創的で、且つ斬新な趣向や工夫を考え出すことは困難であつたから、勢い今まで世に出ている文学作品や文献のうちから適当な創作

上の資料をさがし、それを借り用いるのを常とした。またこれにはことさらに先行の作品を受け入れて、その翻案ぶり、撰取ぶりをもてはやしたという特殊な理由もあることと思う。いずれにしてもひろく和漢古今の典籍にもとづいて作り出され、基礎づけられているところに、読本の一つの特質があるのである。

この知識的・考証的な傾向は都賀庭鐘・上田秋成らの初期読本もそうであるが、馬琴においてまた著しいのである。馬琴は幼少の時代から淨瑠璃・軍記類をはじめ、儒学・国学・諸子百家の書・医書・仏經・稗史小説に至るまで窺わぬところなく、万巻の書を看破ったという（曲亭雜記卷一所引「拙語小錄」によろ。そゝ八六伝「回外剩筆」もほぼ同意）。そしてこういう博洽多方面な学識が基礎になって、その読本の諸作は誕生した。佐々醒雪が馬琴の作品の欠点を述べて、これは純粹な江戸の産物ではなく、諸書から得た知識でできているといい（醒雪遺稿七八四頁参照）、泉鏡花が「古來の作品を見ても、近松は感情で書いて居るし、馬琴は知識を以て書いて居る」（岩波書店発行鏡花全集卷廿八）といったのは尤もな意見である（寺田寅彦も「西鶴と科学」で同様のことを説いた）。

上述の如く馬琴の作品には文献上の原拠は甚だ多いのであるが、それとともに、馬琴が直接の見聞によるものも全くない訳ではない。馬琴は弓張月卷一のはしがきで「愚按するに、保元物語に、為朝島に于自殺の事を載せて、琉球へ渡の説なし。彼説をなすもの、いまだ何に据ことを詳にせず。今軍記の異説、古老の傳話を合せ考、且狂言綺語をもてこれを綴る」といっているが、この「古老の傳話」は文献でない、世上のいい伝えの類をさすのであろう。また「拾遺篇附言」で「金毘羅名號並安井金毘羅之事」を記すというので「余いまだ四國の土を踏ず。或は古記に本づき、或は傳聞によるが故に、遺漏も多く、且訛謬も多かるべし」と述べたのも同意である。このように伝聞によるものもあったことは確かであるが、しかしそれは比較的すくなく、大部分は文献上に拠り所を求めたものと思われる。

それならば、弓張月の文献的な原拠には、どのようなものがあつたかというに、この弓張月には作中に引用の書名を

明記したものもあり、また諸所に「援引書目」として一纏めにあげたものもあるが、それらのうちには、ちよつと引いたという程度のもので、どこを引いたのか明確でないものまでも、典拠としてことごとくあげられているのもあって、必ずしもそれが弓張月著述上のあらゆる資料を明示するとは限らない。作中に書名が示されなくとも、弓張月の有力な材料となったものもある。かくて私が新たに研究調査した結果、知り得たことは、弓張月の創作上の典拠は、多岐多様にわたっているということである。それは材料となったものの数が多いだけではなく、弓張月の構想や内容に大きく影響感化を与えたものもあれば、部分的な趣向、題材の上に粉本となったものもある。私はこれらの典拠を (1) 中国の典籍、(2) 日本の歴史や文学その他、(3) 琉球関係のもの の三種に大別したいと思う。

(1) 中国の典籍として、第一にあげる必要のあるのは、古宋遺民著の水滸後伝である。これは水滸伝の続編ともいうべきもので、水滸伝に現われた豪傑李俊が暹羅に渡ってその国の内乱を鎮定し、国王になる話を書いている。馬琴の当時、中国から日本に輸入されたばかりで、読んだ人は極めてすくなかった、珍しい小説であつたのを、馬琴はいちはやく、それを弓張月の中に取り入れたのである(このことは古く依田学海も弓張月の琉球の話はすべて水滸後伝により翻案したものだといつた)。すなわち為朝を李俊になぞらえ、李俊が暹羅に渡つたように為朝は琉球に渡り、内乱を鎮め、その子舜天丸が国王になったとした。このように弓張月の後半の構想が水滸後伝によつていただけでなく、弓張月の人物である尚寧王・毛国鼎・利勇・嚙雲国師らも、それぞれその模型となった人物が水滸後伝にあり、また部分的な趣向の上にも水滸後伝にもとづくものがすくなくない。ただし馬琴が水滸後伝を書写、校合し、精読したのは文政の終り、天保のはじめであつて、それ以前は、わずかに享和二年、関西地方旅行の時、名古屋で広小路秤座守随所蔵の水滸後伝十巻を披閲し、その回目のみを抄出して、遺忘に備え、ついで大阪滞在中、馬田医師から水滸後伝に二本あることを聞き、あまねく京阪

の書肆を探したが、遂に入手できなかったというのである（歸旅漫録および馬琴の水滸後伝の批評で、天保二年に書いた半間窓談の序言による）。それで弓張月著作の際は、馬琴は水滸後伝をまだ所蔵してはおらず、かねて抄録しておいた回目をたよりとして、記憶をさぐって、これを取入れたものであることが推定される。なお弓張月は水滸伝・三国演義にも依拠する所が多いが（以上三書と弓張月との関係については麻生博士の説に論述されているが、多少訂補を要する所がある）、水滸伝については馬琴は弓張月執筆直前、新編水滸画伝を著わしているから、水滸画伝を通して、水滸伝の影響が二重に鮮明に弓張月に及んだことを知るべきである。また三国演義の翻訳書、湖南文山の通俗三国志も馬琴は三国演義とともに、これ採った形跡がある。本国では軽視されている明の謝肇淛の随筆五雜俎は、日本にわたっては大いに学者、作家の間に行われたが、これも同じく馬琴が藁籠中の物となつて、前篇卷二、第四回の話が作出されている。その他中国の典籍で、弓張月に利用されたものは幾つもある。

上記の如き中国の文献に対して、弓張月の資料となつた(2)日本の歴史・文学の方面にはいかなるものがあるかというに、その重要なものは保元物語・太平記などの戦記物語、近松の百合若大臣野守鏡・並木宗輔らの刈萱桑門筑紫轅・近松半二ら合作の奥州安達原などの浄瑠璃、京伝の優曇華物語、伊豆諸島の地誌類である。

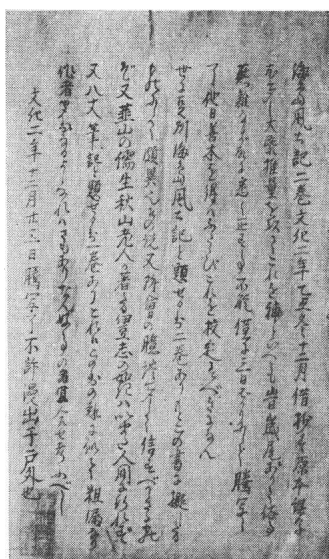
保元物語はいうまでもなく保元の乱の顛末を描いた鎌倉初期の戦記物語で、これには源為朝の事蹟がくわしく現われているので、馬琴はそれを重要な材料とした。弓張月における琉球渡来以前の為朝の行動は、ほぼこの保元物語によつてその輪郭を得たといつてもよい。元來為朝は保元物語中の大立物であり、保元物語は一面為朝武勇伝たるの観があるが、弓張月はその為朝武勇伝的な保元物語の意義を独立強調したものともしえるであろう。ただしこの保元物語には元禄時代、水戸の彰考館で編纂刊行した参考保元物語があるので、馬琴は専らこの参考保元物語を採用している（高橋貞一

氏は新注国文学叢書所収の保元物語の解説で、馬琴が弓張月を書いた時の資料に参考保元物語があったことは、その内容と共に、成實堂文庫の馬琴旧蔵本によっても明らかだと説かれた。太平記はこれも南北朝時代に出た戦記物語である。馬琴は若い頃からこの太平記を愛読翫味し、読本作成の上に大きな影響を受けたが、弓張月もまたそれと関係交渉がある（この点については私は河出書房刊、太平記の研究で詳論した）。百合若大臣野守鏡は主人公が強弓の名人である点が、弓張月と共通するばかりでなく、市郎丸秀虎が船に乗りおくれ、海を泳いで別府の船を追うのは、弓張月第七回、紀平治が為朝の船をおう俤があり、絶海の孤島で百合若が艱難辛苦して幼児還城丸を養育すること、島中に鷹の羽の鎗矢を祭ること、百合若の妻立花の魂魄が鷹の身に乗りうつって夫に仕えること、百合若が矢を放って敵の大船を沈めることなど、殆んど弓張月その儘であって、それぞれ資料になったものと考ええる。刈萱桑門筑紫轡も馬琴には縁故の浅くない浄瑠璃で、その第四段の女之助と繁氏の御台所との関係は、松浦佐用媛石魂録の秋布、下僕俊平の場合に移入され、女主人に対する下僕の恋愛という点で、馬琴としては異色ある一段となっているが、弓張月でもこの浄瑠璃は第三十回、朝稚が父母を雁回山にたずねる一条と転化し、更に同じ趣向が俊寛僧都島物語でも繰返されている（八大伝の荒芽山もこの浄瑠璃に交渉がある）。また弓張月の統篇以下に老婆阿公の話があるが、この阿公が自分の娘と知らず、毛国鼎の夫人の腹を立割って赤児を奪い去り、王子と偽り、守り立てて行くところは、奥州安達原の脱化に外ならぬ。また安達原の初めの方に八幡太郎義家が金の札をつけて鶴を放つことが見えている。馬琴はこれを応用して、弓張月でも同じ鶴の趣向を立てて、弓張月構成の有力な一要素としている（馬琴が早く安達原を見ていたことは、露旅漫録に「安達原の浄瑠璃本」としてあげているのでわかる）。京伝の優曇華物語は文化元年三月の序があり、弓張月以前のものであるが、白縫姫の形容のこと、為朝が野猪退治のこと、朝稚王従が旅路に艱難を重ねること、塚中の異人が鐘を鳴らすこと、阿公が妊婦の腹を割り、児を奪い取ること、

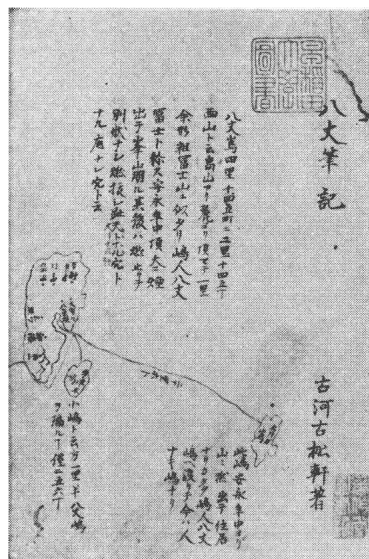
超脱の人物を設け作中の人物を統括せしめることなど、弓張月の原拠となったと思われるものがすくなくない。その他日本方面の所拠としては、宇治拾遺物語・和漢三才図会・都賀庭鐘の繁野話・中山三柳の醍醐隨筆などがある(寛延四年刊行の談義本隅田川鏡池伝の最後、「文刻堂壽梓目録」のうちに「鎮西八郎源為朝實錄、全五冊近刻」の予告がある。また寛政十一年刊、秋雨物語の巻末「流霞窓主人著嗣出書目」には「鎮西豪雄猿臂將軍傳、八郎為朝ノ始末奇異ヲ記、全五冊」とある。私には未見の書であるが、石言遺響が小夜中山靈鐘記から出たように、弓張月もこの同題材の先駆的作品に何か負う所はないか、疑いなきを得ない)。また他人の作のみでなく、馬琴が自己の旧作を再現したものすくなくないことにも気がつく。ことに特記すべきは、一年前の作稚枝鳩との関係である。絲桜春蝶奇縁が八丈島の習作であったと同じような意味で、稚枝鳩は大作弓張月の小手馴らしであったともいえるのである。

伊豆諸島の地誌では、第一に佐藤行信の伊豆国海嶋風土記(天明二年著)があげられる。この書と弓張月との密接な交渉については、早く足立楯太郎氏が東海文庫(静岡県郷土研究会編、昭和四年発行)の解説で、弓張月前篇「備考」から後篇の初めにかけてこの書を材料として使っていることを説いていられるし、近くは大間知篤三氏が八丈島の言語調査(昭和廿五年三月、国立国語研究所発行)で、「本書(弓張月)は戯作ではあるが馬琴の八丈3島に関する理解は、女護島傳説、機織、不淨小屋、怪異、痘神等に関してかなり深いものであったことは明らかである。彼は諸種の八丈島関係の文献を渉猟し、なかなしく伊豆海島風土記から多くのものを得ている。また小島出身の式亭三馬から、また三馬を介して、資料の収集に努力したのであり、その手は八丈島まで伸ばされた」といわれたのは注意すべきである(八丈島の言語調査のこの報告は、本古典文学大系、第五回配本浮世風呂所載、中村通夫氏の同書の解説にも転載されている)。この海嶋風土記は写本として世に伝えられ、また前述の如く、活版として東海文庫の第十二輯にも載っているが、伊賀上野の沖森直三郎氏は馬琴自

筆の海嶋風土記を所蔵せられる。右の沖森氏所蔵本は上下二巻、合一冊、全部で四十二葉ある。馬琴の蔵書印があり、「大嶋之圖説、三宅嶋之圖説、新嶋之圖説、神津嶋之圖説、御藏嶋之圖説、利嶋之圖説、以上六箇條」を上巻とし、「八



伊豆国海嶋風土記（沖森氏所蔵）



八丈筆記（早大附図図書館所蔵）

丈嶋産物風土、同小嶋之圖説、青ヶ嶋之圖説、南京人造立之門圖、空海手形之圖、以上五箇條」を下巻とし、最後に文化二年十二月廿三日、書写の旨の跋文がある。この海嶋風土記の記事は弓張月前篇卷六から以下にさかんに利用されているが、その弓張月の前篇は文化二年十一月起草、十二月脱稿であるから、馬琴は弓張月の著述のためにこの海嶋風土記を他から借用筆写したということになる。次に古河古松軒著の八丈筆記は一卷あり、三河口太忠が備前児嶋郡天城村に滞在の際、古松軒が同人から聞書してできたもので、時に寛政六年仲夏のことであった。馬琴は右の沖森氏所蔵本海嶋風土記の奥書で、八丈筆記と題した一卷があるが、これはこの海嶋風土記の趣に似て粗漏である、作者の聞書ということであるから、当然であるといつて、その内容を非難しているが、しかし弓張月第十六回絹織唄その他の条で、この八丈筆記をより所としており、現に海嶋風土記と前後して書写した馬琴の自